



血は赤いけど、黒っぽくなるのはどうして

血が赤いのは、ヘモグロビンのため

血（血液）の中には、赤血球という小さな小さな細胞があり、血が赤いのは、赤血球の中にある、ヘモグロビンというものが赤いためです。

ヘモグロビンは、鉄分でできています。人間の体を動かすための、エネルギーをつくるには、酸素が必要ですが、ヘモグロビンは、肺で取り入れられた空気中の酸素を、体のすみずみにまで運ぶ、大切なはたらきをしているのです。

体の中の二つの血液の流れ

わたしたちの体の中を流れている血（血液）は、心臓から出発し、身体中を回って、また心臓へ帰ってきます。行きの血管が動脈で、帰りの血管が静脈です。行きの血管を流れている血液は、体に必要な栄養や酸素を、体のすみずみにまで運びます。このときのふくまれているのは、酸化ヘモグロビンで、明るい赤い色をしています。帰りの血管を流れている血液は、体にいらなくなったものや二酸化炭素を運びます。このときのふくまれているのは、かん元ヘモグロビンで、黒っぽい暗い赤い色をしています。

動脈と静脈のうち、動脈は体のずっと内側にあるため、ほとんど見えません。静脈は皮ふのすぐ下を通っており、青く見えています。ですから、指を切ったりして出てくる血は、ほとんどが静脈の中を流れている血で、黒っぽく暗い赤い色をしています。

また、血が衣服などについて黒っぽくなるのは、血液が空気にふれて黒っぽく変化したり、血液の水分が蒸発して、色がこくなるため、黒っぽく見えるのです。

（監修・保志 宏）

